



筑紫女学園大学リポジット

筑紫女学園所蔵水月哲英関係資料目録（附 水月哲英略年譜）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木本, 拓哉, KIMOTO, Takuya メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1065

筑紫女学園所蔵水月哲英関係資料目録（附 水月哲英略年譜）

木本拓哉

凡例

一、本目録は、筑紫女学園が所蔵する学園創立者水月哲英（明治元年「一八六八」～昭和二十三年「一九四八」）に関する資料について作成したものである。なお、この目録は人間文化研究所創立三十周年記念事業の成果の一部である。

二、本目録の記載事項は、通し番号、作品名、写真、員数、品質形状、法量、銘文等、内容、作者、制作年、解説（書き下し文、押韻等）、所在である。ただし、作品によっては採らない事項もあり、別事項を立てることもある。

三、本目録は、下記調査員による資料調査に基づく。資料調査は、令和元年（二〇一九）十月十日と令和二年（二〇二〇）三月十三日に筑紫女学園中学校・高等学校所在分、令和二年（二〇二〇）三月十六日に筑紫女学園大学所在分を対象として行った。

時里奉明（学術情報部長、文学部教授）

小林知美（文学部准教授）

小林久泰（研究所研究主任、文学部准教授）

金見倫吾（研究所リサーチアシリエイト、非常勤講師）

田鍋隆男（研究所客員研究員、元福岡市博物館学芸員）

木本拓哉（研究所客員研究員、非常勤講師）

四、本目録の編集は木本拓哉が行った。編集にあたっては八嶋義之氏（研究所客員研究員、福岡市史編さん室嘱託員）に協力をいただいた。

【主な参考文献】

- ・水月文英『回想録』（花田弥郎・芹川乳編輯、筑紫女学園、一九七二年二月）
- ・『近代洋画と福岡県』（福岡県文化会館、一九八〇年三月）
- ・野田正明『福岡県西洋画 近代画人名鑑』（近代画人名鑑刊行会、一九九五年十二月）
- ・『崇信 筑紫女学園の宗教教育』（筑紫女学園、二〇〇七年五月）
- ・九州産業考古学会『福岡の近代化遺産』（弦書房、二〇〇八年一月）
- ・筑紫女学園百年史編集委員会『筑紫女学園百年史』（筑紫女学園、二〇〇九年五月）



水月哲英肖像

目録

01 墨書「穆」



【頁数】 一幅

【品質形状】 紙本墨書 掛幅装

【法量】 縦三六・七センチ 横四七・三センチ

【銘文等】 墨書「穆」

引首印「昇降居」(白文長方印)

落款印章「哲」「水月／道人」(白文方印)

「哲／英」(朱文方印)

【作者】 水月哲英

【制作年】 未詳

【解説】

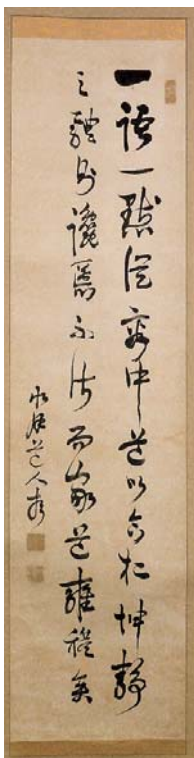
この掛け軸は中高の茶道部が所蔵している。

儒教の経書である『詩経』(大雅、烝民)に「穆如清風(穆として清風の如し)」という言葉がある。心を穏やかにして、清らかな風のようにであるという意味で、おだやかなさまを意味する「穆」は茶道の精神に適った言葉である。

学園の創立まもない明治四十年(一九〇七)に学内組織「精華会」が作られ、生徒たちは活発な課外活動を行っていた。その中に礼法部があり、礼法や茶道や華道などを学んでいた。哲英が茶道を礼法を学ぶ大切なものとして考えていたことが伺える。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校

02 墨書「一語一黙」



【頁数】 一幅

【品質形状】 紙本墨書 掛幅装

【法量】 縦一二二・七センチ 横三〇・五センチ

【銘文等】 墨書「一語一黙 従容中道以合於坤靜

之礼則讒慝不作而家道雍穆矣」

引首印「昇降居」（白文長方印）

落款印章「水月道人哲」

「水月／道人」（白文方印）

「哲／英」（朱文方印）

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

（書き下し文）一語一黙従容として道に中り、以て坤静の礼に合す

れば、則ち讒慝作らず、而して家道雍穆せん。

この一節は『女四書』の「内訓」に見えるもので、「内訓」は中国明王朝の仁孝文皇后（二三六二～一四〇七。永楽帝の皇后）が著したものである。

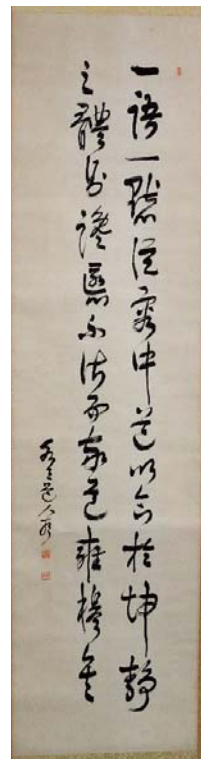
『女四書』には「内訓」の他に、後漢の班昭の「女誡」、唐の伝宋尚宮の「女論語」、明の王相の母劉氏の「女範捷録」（和刻本では唐の侯莫陳邈の妻鄭氏の「女孝経」）が収められている。

この一節は「自然にふるまい静かであれば家庭は和らぐ」という意味である。

「精華会」は教職員及び在校生により結成されたが、卒業生も賛助会員として所属していた。その賛助会員の内、大正三年（一九一四）に結婚した者に記念として精華会より哲英が揮毫した掛け軸が贈られており、それにもこの一節が書かれていた。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

03 墨書「一語一黙」



【員数】一幅

【品質形状】紙本墨書 掛幅装

【法量】縦一二五・八センチ 横三一・九センチ

【銘文等】墨書「一語一黙従容中道以合於坤静

之礼則讒慝不作而家道雍穆矣」

引首印「閑情時又／夢風涼」（朱文長方印）

落款印章「水月道人哲」

「水月／道人」（白文方印）

「哲／英」（朱文方印）

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

02と同じ漢文が書かれている。哲英はこの文章を好んでいたのだろう。

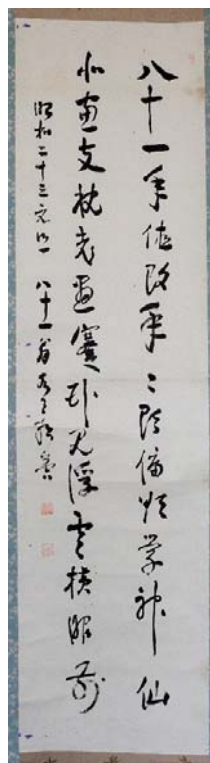
またこの掛け軸は楽山荘で保管されていた。この楽山荘は学園創立五十周年を迎えた昭和三十二年（一九五七）に建設が計画され、昭和三十九年（一九六四）に造られた研修施設である。落成以来、高等学

校二年生の日帰り研修の場として使われていた。

楽山荘が作られたのは哲英の没後であるが、哲英の掛軸が掛けられていたことで、哲英の志を学ぶ場としても意識されていたのだろう。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校

04 七言律詩「八十一年値改年」



【頁数】 一幅

【品質形状】 紙本墨書 掛幅装

【法量】 縦九一・五センチ 横二三・六センチ

【銘文等】 墨書「八十一年値改年年頭偏願学神仙」

北窓支枕老愚蹇臥見浮雲横眼前」

引首印「昇降居」（白文長方印）

落款印章「昭和二十三年元旦 八十一翁水月哲英」

「水月／道人」（白文方印）

「哲／英」（朱文方印）

巻留墨書「水月哲英絶筆」

【作者】 水月哲英

【制作年】 昭和二十三年（一九四八）

【解説】

（書き下し文） 八十一年値は年を改む

年頭偏えに願う神仙に学ぶを

北窓に枕を支え老愚蹇し

臥して浮雲を見れば眼前に横たう

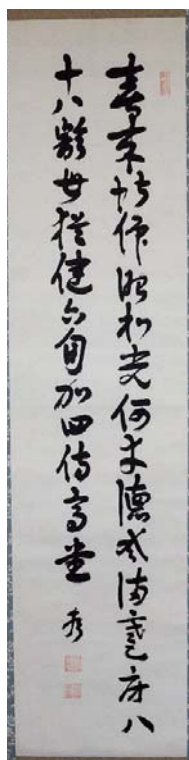
（押韻） 年、仙、前。下平声の第一「先」。

昭和二十三年（一九四八）元旦の筆である。この詩を詠んだ二か月後の三月に逝去した。

年頭にあたり神仙に学ぼうと願った。神仙は不老不死の力を持った神である。窓から見える雲を見つめて、やり残したことに思いを馳せていたから不老不死の力を手に入れたかどうかののだろうか。

【所在】 筑紫女学園大学

05 七言律詩「春来博仰昭和光」



【頁数】 一幅

【品質形状】 紙本墨書 掛幅装

【法量】 縦一三四・四センチ 横三一・五センチ

【銘文等】 墨書「春来博仰昭和光何才德哉満蹇房八」

十八齡世猶健亦旬加四侍高堂」

引首印「閑情時又／夢風涼」(朱文長方印)

落款印章「哲」

「昇降／居／主人」(白文方印)

「水月哲／英之印」(朱文方印)

卷留墨書「母堂米寿賀 哲英抄」

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

(書き下し文) 春来りて博く仰ぐ昭和の光

何ぞ才徳や寔房を満たん

八十八齡世猶お健やか

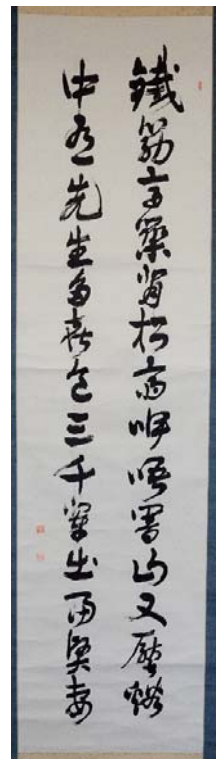
亦た旬に四を加え高堂に侍る

(押韻) 光、房、堂。下平声の第七「陽」。

誰かの母親の米寿を祝って詠まれた漢詩である。「才徳が困窮な部屋を満たし」と詠んでおり、その母堂の人柄がよく伝わってくるようである。

【所在】筑紫女学園大学

06 七言律詩「鐵筋高築背松高」



【頁数】一幅

【品質形状】紙本墨書 掛幅装

【法量】縦一三三・二センチ 横三三三・八センチ

【銘文等】墨書「鐵筋高築背松高呻晤響山又歴谿

中有先生多喜色三千輩出当賢妻」

引首印「昇降居」(白文長方印)

印章「水月／道人」(白文方印)

「哲／英」(朱文方印)

卷留墨書「水月哲英老口書」

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

(書き下し文) 鐵筋高築背は松より高し

呻晤は山に響き又た谿を壓ゆ

中に先生有りて喜色多し

三千輩出し当に賢妻となるべし

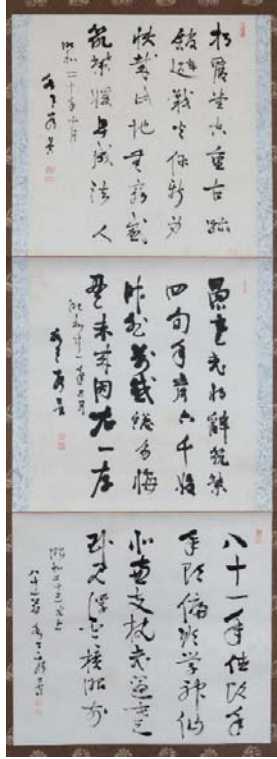
(押韻) 谿、妻。上平声の第十二「齊」

昭和三年（一九二八）に哲英は藍綬褒章を賜った。それを記念して計画されたのが新校舎の建設であった。そして昭和十年（一九三五）に新校舎を完成した。その時のことを詠んだ漢詩である。

九月三十日に落成した新校舎は鉄筋コンクリート製の三階建てであった。当時の福岡市内でも鉄筋コンクリート製の校舎は珍しかった。喜びの声は山に響き、谷を越えたと詠んでいるので、その喜びの大きさが伺える。

【所在】筑紫女学園大学

07 漢詩三題



【員数】一幅三紙

【品質形状】紙本墨書 掛幅装

【法量】「上」縦二五・九センチ 横二四・一センチ

「中」縦二六・八センチ 二四・一センチ

「下」縦二五・〇センチ 二七・三センチ

【銘文等】「上」墨書「08参照」

引首印「昇降居」（白文長方印）

落款印章「昭和二十年十月 水月哲英」

「哲」（白文方印）、「英」（朱文方印）

「中」墨書「愚童老将辭筑紫／四句年育六千媛／時然萬感
 総多悔／貫未来因右一存」

引首印「昇降居」（白文長方印）

落款印章「昭和廿一年三月 水月哲英」

「哲」（白文方印）、「英」（朱文方印）

「下」墨書「04参照」

引首印「昇降居」（白文長方印）

落款印章「昭和二十三年元旦 八十一翁 水月哲英」

「哲」（白文方印）、「英」（朱文方印）

【作者】水月哲英

【制作年】「上」昭和二十年（一九四五）

「中」昭和二十一年（一九四六）

「下」昭和二十三年（一九四八）

【解説】

（書き下し文）「中」愚童老将筑紫を辞す

四句の年育てるは六千の媛

時然りて萬感総て悔い多し

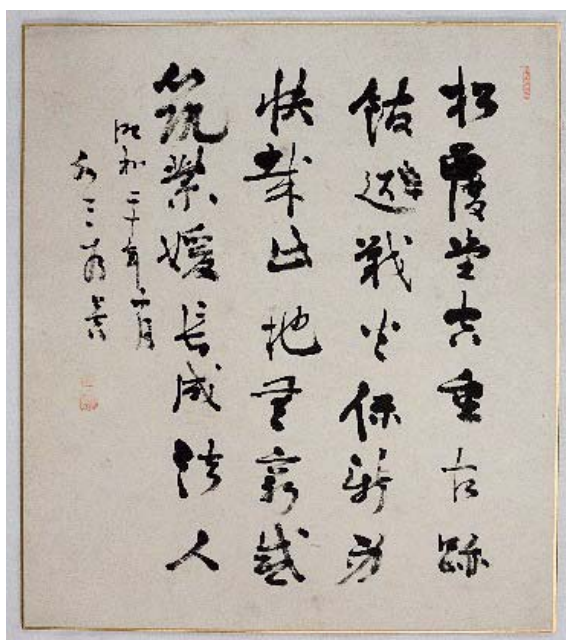
未来の因を貫き一存を右ぶ

昭和二十一年（一九四六）三月、哲英は校長を引退している。筑紫女学園は明治四十年（一九〇七）に開学しており、それから約四十年

たっている。その間に六千人もの卒業生を送り出した。これまでのこ
とを振り返り、様々な思いが込み上げてきたのだろう。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

08 七言律詩「松慶堂真重古跡」



快哉此地無窮感

筑紫媛長成清人

引首印「昇降居」(白文長方印)

落款印章「昭和二十年二月 水月哲英」

「哲」(白文方印)、「英」(朱文方印)

【作者】水月哲英

【制作年】昭和二十年(一九四五)

【解説】

(書き下し文) 松慶堂の空重古の跡

館は戦火を避け新身を保つ

快きかな此の地窮感無し

筑紫の媛長じて清人と成らん

昭和十九年(一九四四)九月に歩兵連隊が校舎に駐留するようになった。翌二十年(一九四五)には軍司令部があった舞鶴城が爆撃にあつたため、司令部が本校に移転してきた。そのため本校の東側にある西光寺(警固)の本堂に学びの場を移した。その時に詠まれた漢詩だろ
う。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

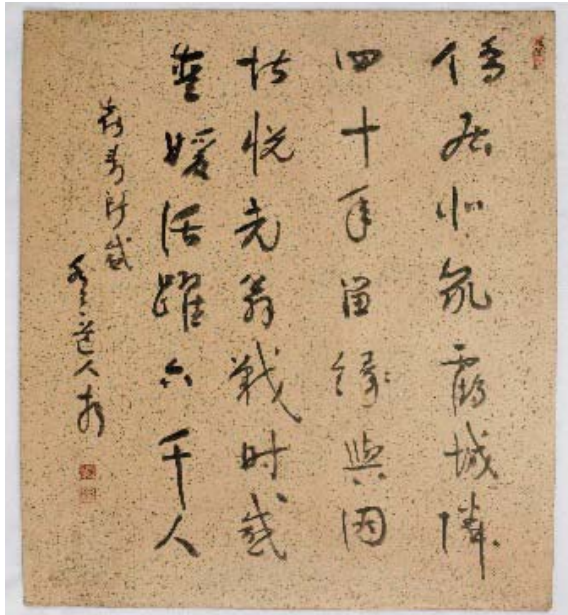
【頁数】一面

【品質形状】紙本墨書 色紙額装

【法量】縦二七・一センチ 横二五・一センチ

【銘文等】墨書「松慶堂空重古跡

館避戦火保新身



【頁数】 一面

【品質形状】 紙本墨書 色紙額装

【法量】 縦二七・三センチ 横二四・一センチ

【銘文等】 墨書「僧居北筑鶴城隣

四十年留縁與因

詩悦老翁戰時感

愛媛活躍六千人」

引首印「昇降居」（白文長方印）

落款印章「崑寿所感 水月道人哲」

「哲」（白文方印）、「英」（朱文方印）

【作者】 水月哲英

【制作年】 未詳

【解説】

（書き下し文） 僧北筑に居るは鶴城の隣

四十年留まる縁と因

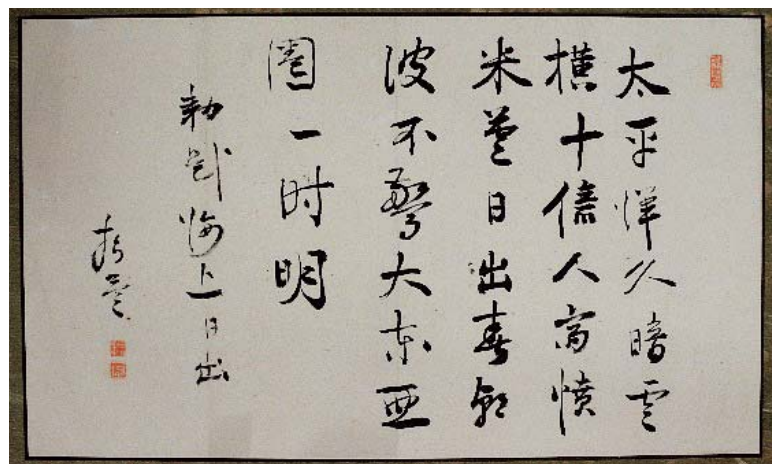
詩は老翁を悦ばず戦時の感

愛媛活躍す六千人

（押韻） 隣、因、人。上平声の第十一「真」。

哲英七十七歳、昭和十九年（一九四四）の書である。明治三十四年（一九〇一）にアメリカから帰国し、翌年に仏教中学の教頭となり、明治四十年（一九〇七）に筑紫女学校を開校させた。それからおよそ四十年。戦時中でも、漢詩を作ることが喜びであると詠んでいる。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校



米英日出春朝

波不驚大東亞

圈一時明

引首印「昇降居」(白文長方印)

落款印章「勅題海上日出 哲英」

「哲」(白文方印)、「英」(朱文方印)

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

(書き下し文) 太平洋久しく晴れ雲横たわる

十億人高く米英を憤す

日の出の春朝波驚かず

大東亜圈一時も明るかん

(押韻) 横、英、明。下平声の第八「庚」。

昭和十九年(一九四四)の歌会始の勅題「海上日出」に因み作られたものである。歌会始の勅題を詠んだ漢詩はいくつか作っていたようで、それらは校友誌『筑紫』に寄せている。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

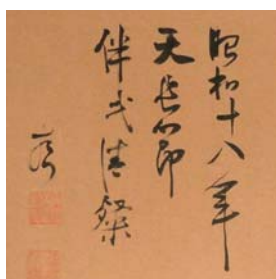
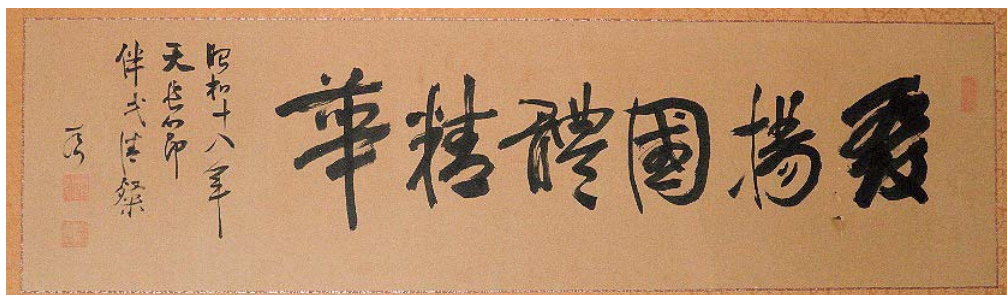
【頁数】一面

【品質形状】紙本墨書 額装

【法量】縦一九・六センチ 横三三・一センチ

【銘文等】墨書「太平洋久晴雲

横十億人高憤



部分

【頁数】一面

【品質形状】紙本墨書 額装

【法量】縦三十・五センチ 横一一・八センチ

【銘文等】墨書「發揚國體精華」

引首印「閑情時又／夢風涼」（朱文長方印）

落款印章「昭和十八年天長節伴式清祭 哲」

「昇降／居／主人」（白文方印）

「水月哲／英之印」（朱文方印）

【作者】水月哲英

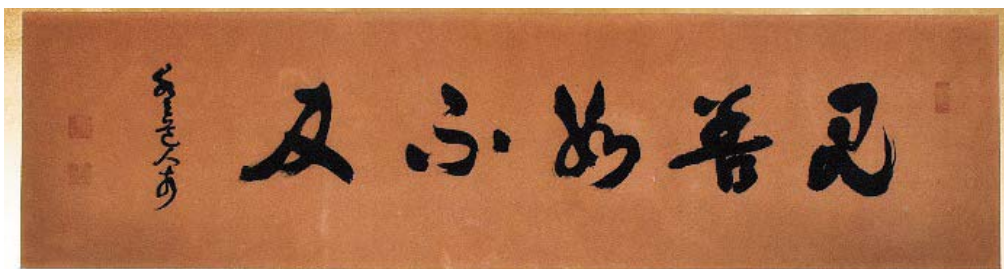
【制作年】昭和十八年（一九四三）

【解説】

昭和十八年（一九四三）の天長節にあたり揮毫した書である。「國體精華」は『教育勅語』にある「國體ノ精華」を踏まえたものである。天長節を含めた四大節には、学校で校長が生徒を集めて「教育勅語」を読み上げていた。恐らく哲英も学生の前で読み上げていたと思われる。

戦前の哲英は「国体精華」の語を含む漢詩を度々詠んでいる。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校



印章

【員数】一面

【品質形状】紙本墨書 額装

【法量】縦三三・三センチ 横一二七・六センチ

【銘文等】墨書「見善如不及」

引首印「閑情時又／夢風涼」(朱文長方印)

落款印章「水月道人哲」

「昇降／居／主人」(白文方印)

「水月哲／英之印」(朱文方印)

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

「見善如不及」(善を見ては及ばざるがごとし)は『論語』季氏篇に見える言葉で、善いものを見たならばそれに向かって努力するという意味である。

若い頃から漢学に親しんでいた哲英ならではの書といえよう。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校



引首印

「昇降／居／主人」(白文方印)
 「水月哲／英之印」(朱文方印)

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

『詩経』「大雅」に「初め有らざるなし、克く終有る鮮し」とある。これは「有終の美を飾る」の「有終」で、最後までやり遂げ成果を挙げるという意味である。最後まで教育に身をささげる哲英の思いが込められているものと思われる。

また『易経』「謙」には「勞謙す。君子終有りて、吉なり」とある。この君子の「有終」とは、大功があつたとしても少しも誇らず、謙徳を全うするという意味として解釈されている。この意味に当てはめるならば、まさにこれは哲英が掲げた学園の三徳目である「品性」「勤勞」「質素」の徳育・知育・体育の人間教育に繋がるものとなるだろう。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

【員数】一幅

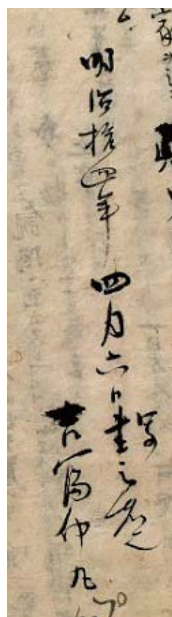
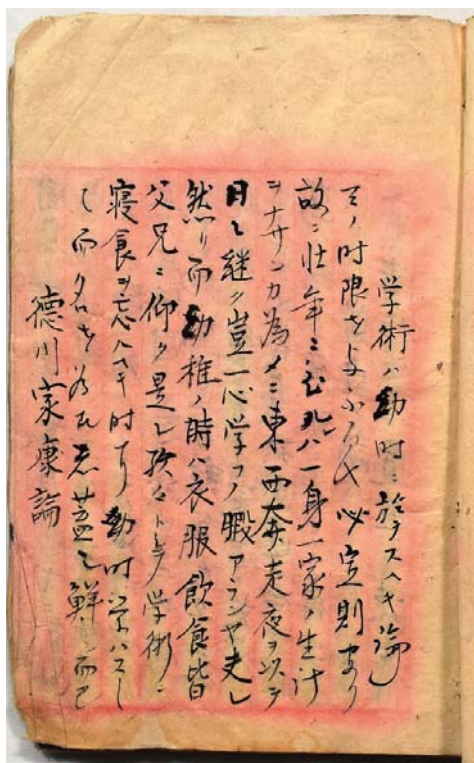
【品質形状】紙本墨書 額装

【法量】縦三三・五センチ 横六二・五センチ

【銘文等】墨書「有終」

引首印「閑情時又／夢風涼」(朱文長方印)

落款印章「哲」



裏目第19丁

【頁数】一冊

【品質形状】紙本墨書 仮綴装

【法量】縦二三・二センチ 横一五・五センチ

【内容】(題目のみ抜粋)

「(題未詳)」「納涼記」「暑中北窓ニ眠ルノ記」「頼朝ノ論」「太閤秀吉ノ論」「恭時ノ論」「字ハ學フヘキノ説」「算ハ學フヘキノ説」「農ハ務ムヘキノ説」「信長論」「勉強ハ富貴ノ基タル説」「習字務

メザルベカラサル説」「人ハ萬物ノ靈タルノ論」「節儉ノ論」「暑中北窓ニ書ヲ讀ムノ記」「觀月ノ記」「學術ハ幼時ニ於テスヘキノ論」(※写真頁)「徳川家康論」「道真ノ論」「楓葉ヲ觀ルノ記」「虚言スヘカラサル説」「農業ヲ盛大ニスヘキノ論」「良友ヲ撰フヘキノ説」「孝ハ義□ノ本タル説」「釣魚ノ記」「兄弟友愛ハ厚クスヘキノ説」「中秋月ヲ弄スルノ記」「友ハ撰フヘキノ説」「人ハ勉強スヘキノ説」「人ハ勉強スヘキノ説」「雨中學校ニ登ル途中ノ記」「新聞ノ説」「大石義雄論」「楠正行ノ論」「季冬市ニ遊フノ記」「教化ヲ厚クスヘキノ論」「人ハ禽獸ト異ナル論」「新年學校開業テ祝文」「藝ハ身ヲ助説」「土筆ヲ採ル記」「重盛論」「勉強ハ富貴ノ基タル説」「動物ヲ妄ニ殺スヘカラサル説」「夢ヲ記」「光陰ヲ惜ムヘキノ説」「同説」「同説」「陰徳アレハ陽報アル説」「民権ヲ主張スヘキノ論」「神武天皇祭ノ祝詞」「字ハ學フヘキノ説」「暑中北窓ニ書ヲ讀ムノ記」「春遊記」「小學生賀天長節記」「郵便ノ事ヲ記」「博覽會ヲ見ル記」「早梅ヲ搜ルヲ記ス」「湖辺ニ遊ヲ記」「小学校ノ事ヲ記」「病中ノ感ヲ記」「田家秋晩ノ事ヲ記ス」「雪夜讀書ノ事ヲ記」「水ヲ愛スル記ス」「雨ノ事ヲ記」「蒸氣船ノ事記」「公園地遊ヲ記」「新年宴會記」「算ハ學フヘキノ説」「健康ヲ保ツ説」「養生術」「電信機説」「可知律法説」「愚者ト雖勤勉スヘキノ説」「平生ヲ慎ム可キノ説」「曆ノ説」「小学ノ業ハ必ス學フヘキノ説」「潮ノ満干ノ説」「物ヲ偏愛スヘカラサルノ説」「其分ヲ守ルヘキノ説」「不義ノ賊ハ益ナキノ説」「人ヲ誹謗スヘカラサル説」「偽飾ハ為ス可ラサル説」「小事ヲ輕忽ニス可ラサル説」「機器ハ惜シマスニ用ユヘキノ説」

説」「樂ハ苦ノ種トナル説」「傲ハ生レ易キ説」「世間ヲ知ラヌ者ハ己ヲ慢スル説」「光陰ヲ惜ムノ説」「勤勉スルモノニ貧困ナキ説」「財業ヲ耻可ラスノ説」「雑草ノ勉メテ除ヘキ説」「犬ハ人間有用ノ畜類タルノ説」「梅ヲ愛スル説」「秋日田家ニ遊ヲ記」「海辺ニ遊ヲ記」

〔識語〕 墨書「明治拾四年四月六日写之者也／吉富仲丸」

〔作者〕 水月哲英

〔制作年〕 明治十四年（一八八二）

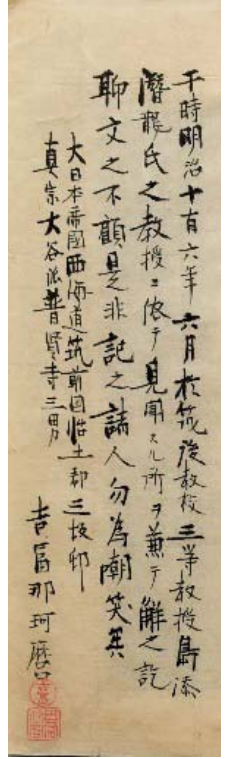
〔解説〕

この冊子は罫線紙に毛筆で書かれたもので、前半と後半とで罫線の色が赤と青とになっている。その前半の最後に明治十四年（一八八二）の識語が記されている。また前半と後半と同一のものもあり、後半の方が丁寧に書かれておることから、後半は前半をもとに書き加えたものだと思われる。明治十四年、哲英は十四歳では筑後教校（後の久留米真宗中学）で学んでいたころである。

この冊子の内容は論説と雑記とから成り、それぞれ教行の短い文章である。「頼朝ノ論」「信長論」などの人物評から、「兄弟友愛ハ厚クスヘキ論」「人ハ勉強スヘキ説」などの道徳・教育について論じている。哲英の少年時代の学びの様子が知れる貴重な資料である。

〔所在〕 筑紫女学園中学校・高等学校





33丁目表

【頁数】一冊

【品質形状】紙本墨書 冊子装

【法量】縦二四・三センチ 横一六・四センチ

【内容】改悔文の講義録

(表紙題箋) 墨書「宗部第一 改悔文講義 全」

(最終頁) 墨書「于時明治十有六年六月於筑後教授三等教授島添

潜龍氏之教授ニ依テ見聞スル所ヲ兼テ解之訖 聊文之不顧是非記之諸人勿為嘲笑矣

大日本帝國西海道筑前国怡土郡三坂町

真宗大谷派普賢寺三男 吉富那珂磨

(最終頁印章) 「吉富」(朱文円印)

「吉富仲丸」(朱文方印)

【作者】水月哲英

【制作年】明治十六年(一八八三)

【解説】

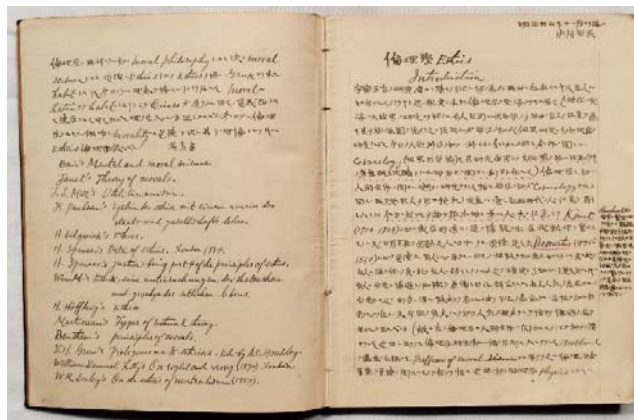
表紙付きで製本されている稿本である。本願寺第八世蓮如(一四一五〜一四九九)の「改悔文」について、明治十六年(一八八三)に筑後教授で教授の島添潜龍が行った講義を聴講して書き記したものであ

る。

筑後教授は真宗大谷派が設置した仏教中学である。その筑後教学での講義について知れる貴重な資料である。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

16 『倫理学ノート』



【頁数】一冊

【品質形状】紙本ペン書 横書 クロス表装

【法量】縦二〇・三センチ 横一六・二センチ

【内容】倫理学のノート

(識語) ペン書「明治卅五年十一月ヨリ編ス 水月哲英」

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

【解説】

明治三十五年(一九〇二)十一月、第四仏教中学福岡分教場に教頭として赴任することとなった。哲英、三十五歳の時である。赴任して間もなく書かれたこのノートは、英語交じりの文章が細かな字で書かれている。

若いころから漢字に親しんだ哲英であったが、仏教中学では西洋の倫理学について指導したようである。漢学や仏教などの東洋哲学のみならず西洋哲学も理解していたことになる。この幅広い知識から哲英独自の教育理念が結実したのだろう。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

17 『回想録』

【頁数】一冊

【品質形状】紙本印刷 冊子装

【法量】縦二二・〇センチ 横一四・七センチ

【内容】「回想録」の抜き刷り

【作者】水月哲英

【制作年】未詳

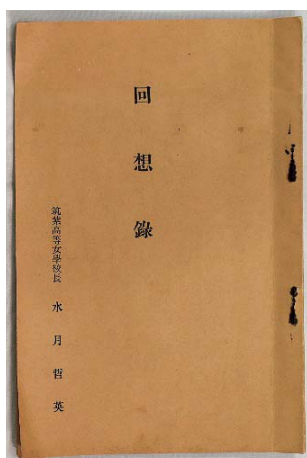
【解説】

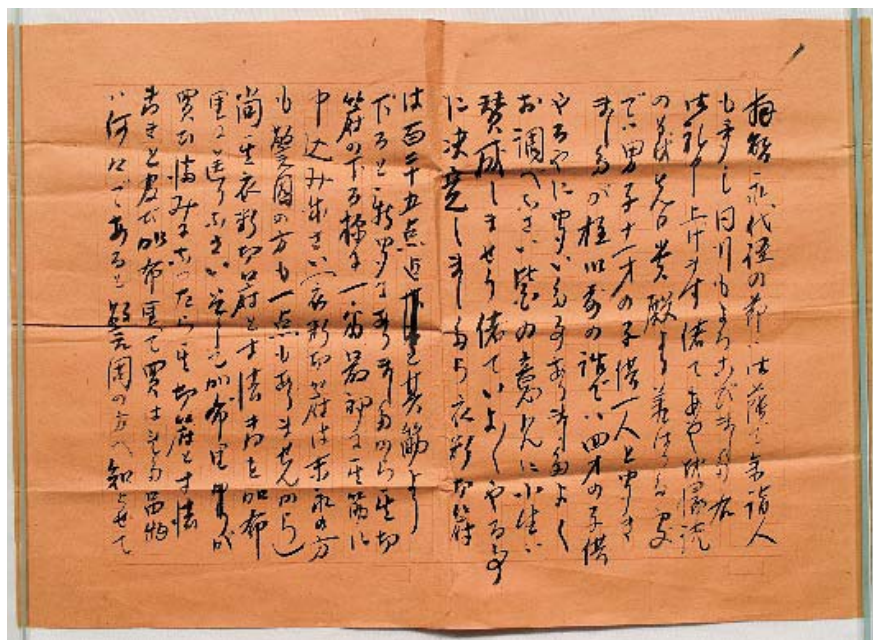
校友誌『筑紫』第二十五号(昭和十一年「一九三六」三月)に寄せて書いた回想録の抜き刷りである。

この昭和十年(一九三五)十月十九日に鉄筋コンクリートの新校舎の完成と卒業生が三千人になったことを記念した式典が開かれた。祝賀会に続いて、学園創設以来の支援者や教職員、卒業生、在校生の物故者の追悼会、そして卒業生大会が開かれ、一つの区切りを迎えた。

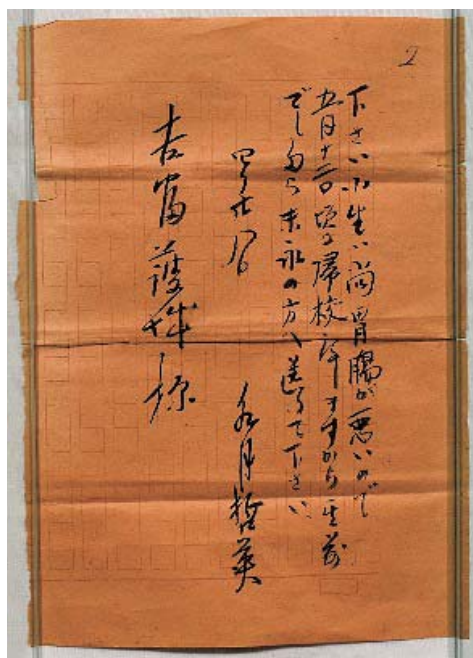
そこで哲英は学園創設のいきさつや、学園の歴史をまとめた。この文章の一言一句からは、哲英の女子教育への並々ならぬ思いが伝わってくる。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校





1 枚目



2 枚目



封筒

【頁数】一通

【品質形状】原稿用紙墨書

【分量】(書簡一紙目) 縦二五・〇センチ 横三五・七センチ

【内容】

(日付) 四月廿八日

(差出) 水月哲英

(宛先) 吉富護城

(文面) 拝啓 永代経の節ハ御蔭で来詣人も多く同行もよろこびま

した。右御礼申上げます。偕てあやを帰談の義先日貴殿より承はり候処でハ男子十一才の子供一人と聞きましたが桂以前の話でハ四才の子供やるやに聞いた事ありました。よくお調べなさい。皆の意見に小生ハ賛成しませう。偕ていよくやる事に決定しましたら衣料切符は百二十五点迄■■■■其筋より下ると新聞にありましたから其切符の下る様に一番最初に其筋に申込み下さい（衣料切符は末永の方も警固の方も一点もありませんから）尚其衣料切符と寸法書を加布里に送りなさい。そして加布里■■■が買ひ済みになつたら其切符と寸法書と及び加布里で買はせた品物は何々であると警固の方へ知らせて下さい。小生ハ尚胃腸が悪いので五月十二日頃に帰校致しますから其義でしたら末永の方へ送つて下さい。

【作者】 水月哲英

【解説】

哲英から吉富護城に宛てた書簡である。19も吉富宛ての葉書がある。

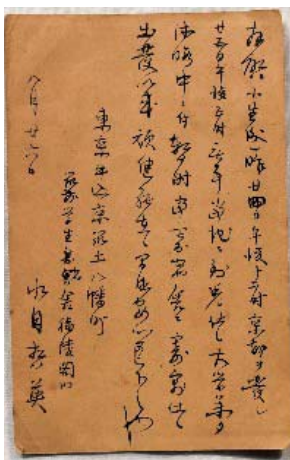
この書簡は衣料切符について記されている。衣料切符は昭和十七年（一九四二）から約十年の制度なので、その間のものだろう。

加布里というのは、哲英の弟である教英が入寺している正入寺（浄土真宗本願寺派、糸島市加布里）を指し、末永は哲英の西光寺（糸島市末永）であると考えられる。

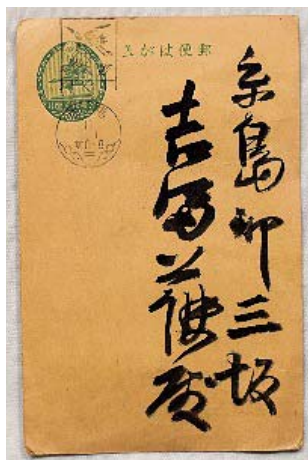
19 葉書



A表



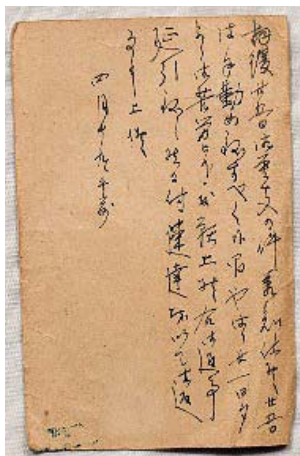
A裏



B表



B裏



C表



C裏

【頁数】葉書三葉

A

【品質形状】葉書墨書

【法量】縦一四・一センチ 横九・〇センチ

【内容】

(日付) 八月二十六日

(差出) 水月哲英

(宛先) 吉富円証

B

【品質形状】葉書墨書

【法量】縦一四・一センチ 横九・一センチ

【内容】

(日付) 八月二十六日

(差出) 水月哲英

(宛先) 吉富護

C

【品質形状】葉書墨書

【法量】縦一四・〇センチ 横九・〇センチ

【内容】

(日付) 昭和十九年四月十九日

(差出) 水月哲英

(宛先) 吉富護城

【解説】

哲英が書いた葉書三通である。三通とも同じ住所であるので、哲英

の実家である普賢寺（真宗大谷派）へ送ったものと思われる。Aは哲英の義兄である吉富円証（父円信と前妻みつとの間の子）に宛てたものである。東京から出されたものであるので、哲英の帝大時代に出されたものであろう。B・Cは吉富護城宛に送ったものである。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校

20 車椅子



【員数】 一台

【解説】

明治三十三年（一九〇〇）十月八日、西本願寺からアメリカ駐在の辞令を受けた哲英は渡米し、同年十二月十四日にサンフランシスコに到着した。当時の西海岸には二万人ほどの在米邦人がおり、彼らのほとんどが日雇い労働者であった。彼らのために法話会を催す他に英語学校の運営を行い、教育と就職の斡旋などもしていた。また雑誌『米

国仏教』の編集なども行っていた。さらにはアメリカ人の仏教信者の会である「三宝会（ダルマ・サンガ・オブ・ブツダ）」の会長として、講演会や研究会を催し、精力的に開教活動に従事していた。そんな激務の中の明治三十四年（一九〇一）六月二十七日、階段を踏み外し転落した。その際、脊髄を損傷し寝たきり状態となった。九月にアメリカ駐在の任が解かれ、そして十月三十一日に帰国するために船出した。

この車椅子は帰国の船中で使用したものである。椅子の四つの足の底に車が付いている。自力で動かせず、常に誰かに押ししてもらわねばならない。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校

21 松葉杖



【員数】 二本一組

【解説】

明治三十四年（一九〇二）十一月二十日、哲英はアメリカから帰国した。すぐに西本願寺築地別院に赴き明如法主のねぎらいの言葉を受けた。その後、東京大学病院に四十日間入院し、懸命なりハビリに励み、松葉杖で歩行が出来るようになった。これはその時の松葉杖である。

この松葉杖を使ったのはほんの僅かな時期だと思われるが、それを大事に残していたことになる。哲英にとってこの松葉杖は自身の再起を象徴する大切な思い出の品だったのだろう。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校

22 肖像画



【員数】 一面

【品質形状】 キャンバス地油彩 額装

【法量】 縦七一・二センチ 横五九・二センチ

【作者】 杉江春男

【制作年】 未詳

【解説】

学園に所蔵されている肖像写真はほとんどが左前からのものである。しかしこの肖像画は正面から描かれており、珍しいものといえるだろう。

作者の杉江春男（一八八八～一九四五）は、福岡中学（現在の県立福岡高校）の教師である。東京に生まれ、明治四十年（一九〇七）に東京美術学校西洋画科予備科に仮入学し、後に本科に入り、卒業後も研究科に籍を置いた。大正八年（一九一九）に福岡中学に図画教師に赴任した。生涯、中央の美術団体に属せず、福岡で教育活動に専念した。

描かれている哲英の胸には褒章の正章が付けられている。哲英が教育功労者として藍綬褒章を賜ったのは昭和三年（一九二八）であるので、それ以降に描かれたものだろう。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校

23 肖像画



【員数】一面

【品質形状】キャンバス地油彩 額装

【法量】縦七一・六センチ 横五九・三センチ

【作者】光安浩行

【解説】

哲英の肖像写真をもとに描いたと思われる肖像画である。

作者の光安浩行（一八九一～一九七〇）は福岡市に生まれ、中学修猷館（現在の修猷館高校）を卒業した後、太平洋画会研究所に通い中村不折（一八六六～一九四三）や岡精一（一八六八～一九四四）に師事した。和田三造（一八八三～一九六七）らの在京の福岡出身者で筑前美術展を開いた。また、示現会の設立に参加している。

光安が修猷館の大先輩である哲英の肖像画を描いていることに縁を

感じる。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

24 胸像



正面



背面



底面

【員数】一躯

【品質形状】銅铸造

【法量】 縦一八・〇センチ 横一一・一センチ 奥一一・〇センチ

【銘文等】 背側表面陰刻銘「水月哲英」

左肩表面陽刻名「えいち」

【作者】 未詳

【制作年】 未詳

【解説】

哲英の銅製の胸像である。作者と銘と思われるのが左肩に彫られた「えいち」であるが、この人物に関しては未詳である。

穏やかな表情をしており、哲英の人物を忍ばせるものである。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校



25 記念碑

【員数】 一基

【品質形状】

(全体) 石製

(肖像) 銅鑄造

【法量】 (肖像) 縦四九・八センチ 横四七・八センチ

【銘文等】 表面陰刻「創業者水月哲英校長先生」

背面陰刻「創立五十周年記念 昭和卅二年仲秋」

【作者】 未詳

【制作年】 昭和三十二年(一九五七)

【解説】

筑紫女学園の創立五十周年を記念して作られた石碑である。表側に銅製の肖像レリーフがはめ込まれ、その下には「創業者水月哲英校長先生」の文字が彫られている。また背面には「創立五十周年記念 昭和卅二年仲秋」と彫られており、この石碑が昭和三十二年(一九五七)八月に作られたことが分かる。

現在は中学・高校の中庭に設置してある。

【所在】 筑紫女学園中学校・高等学校



正面



外観



内部



額

【員数】一軒

【構造及び形式等】木造平屋建。瓦葺一部銅板葺。二間。

【面積】建築面積三十八平方メートル

【施工】井上弥六

【竣工】昭和十五年（一九四〇）。平成十五年（二〇〇三）改修。

【解説】

中学校・高等学校の敷地内にある茶室である。学園の創立三十周年記念及び哲英の古希の祝賀記念として造られた。学内組織の精華会の礼法部において茶道を学んでいた。哲英が茶道を重んじていたことが伺える。

「洗心」は儒教の経典『易経』に見える語で、「心の汚れや雑念を取り除く」という意味である。茶道を通して人格の修養を期待していたものと思われる。

平成二十三年（二〇一一）三月十日に国指定登録有形文化財（建造物）に登録されている。

【所在】筑紫女学園中学校・高等学校

水月哲英略年譜

【凡例】

一、本年譜は、水月哲英の事項および目録に関わる事項を中心に年代順にまとめた年譜である。

二、本年譜は本拓哉が作成した。水月哲英の略歴を整理するにあたり

水月昭道氏（筑紫女学園理事、西光寺住職）の協力を得た。

【主な参考文献】

・水月文英『回想録』（花田弥郎・芹川乳編輯、筑紫女学園、一九七二年二月）

・『崇信 筑紫女学園の宗教教育』（筑紫女学園、二〇〇七年五月）

・筑紫女学園百年史編集委員会『筑紫女学園百年史』（筑紫女学園、二〇〇九年五月）

明治元年	一八六八	二月二日、普賢寺（大谷派、糸島市）に生まれる。父は第十三世住職の吉富円信で、母はまつ。幼名は仲丸。
十四年	一八八一	筑後教校（久留米真宗中学）に入学。
十六年	一八八三	七月、修文館（塾主魏姑射徳令）に入門。
十八年	一八八五	萬有家塾（塾主蒲池徳讓）に移る。
二十年	一八八七	一月、福岡県立修猷館（修猷館高等学校）に入学。
二十四年	一八九一	八月、熊本第五高等学校（熊本大学）に入学。西光寺（本願寺派、糸島市）の水月僧澄の娘チヨと結婚、水月姓となる。
二十八年	一八九五	九月、東京帝国大学文科大学（東京大学）に入学。

三十二年	一八九九	四月、北蒲原中学校（新潟県立新発田高等学校）に教員として赴任。
三十三年	一九〇〇	西本願寺から桑港仏教青年会の会長として米国駐在の辞令を受け、渡米。
三十四年	一九〇一	六月、階段から転落し、脊髄を損傷。
四十年	一九〇七	十一月、帰国。
大正五年	一九一六	第四仏教中学福岡分教場の教頭になる。
十年	一九二一	四月、筑紫女学校を開学。
昭和四年	一九二九	五月、筑紫高等女学校へ改組。
六年	一九三一	馬奈木文助を長女キクノの婿とし、西光寺に迎える。法名は文英。
八年	一九三三	西光寺の本堂、庫裏が全焼。
九年	一九三四	二月、藍綬褒章を受ける。
十年	一九三五	県教育会長より記念品・顕彰状を贈呈される。
十五年	一九四〇	四月、学園仏教青年会を創設。
二十一年	一九四六	十一月、帝国教育会五十周年記念に際し、表彰を受ける。
二十三年	一九四八	十二月、福岡市教育会長より慶彰状を受ける。
		十月、全国中等学校恩給財団理事長より表彰を受ける。
		『石門先生』を発刊。
		鉄筋コンクリートの新校舎が完成。
		洗心庵、落成。
		三月、校長の職を文英に譲り、勇退する。
		四月二十一日、逝去。
		五月一日、学校講堂にて校葬。

（きもと たくや…人間文化研究所 客員研究員）

筑紫女学園所蔵水月哲英関係資料目録

木
本
拓
哉

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第三十一号 二〇二〇年